

天神ヶ滝「水行直仕形図」

今からおよそ160年の昔、天保元年(1830)10月、煎沢村(現山梨県甲西町)の呉服商『湊屋』の二人娘の乗った身延山詣での舟は、富士川通船第一のアクバ(通船困難な場所)『天神ヶ滝』で破船した。

この年、天保元年は「今年ゃよい年豊年どしよ」と、台風などのさしたる災禍もなかった今年のように、田畑の稔りは豊かな年でもあったろうか。「身延参詣えやるではないか」と、ゆどりの年でもあった。

甲府盆地を南へ流れる川に、盆地の西、南アルプス北部の山地を源とする釜無川と、甲武信ヶ岳を水源として、盆地の東部を流れる笛吹川とがある。この二つの川は、盆地の南端の町『鰍沢』の北で合して富士川となり、やがては駿州『岩淵』(現静岡県富士川町)で駿河湾にそそぐ。その幹線流路は、延長して約128km、河口より85km距てた『韭崎市武田橋』までの平均河床勾配は1/240と、最上川、球磨川とならんで、我が国三大急流の一つに数えられ、霖雨や驟雨の度ごと氾濫しては、流域一帯に大災害をもたらしていた。

江戸期慶長12年、徳川家康はこの富士川を開削して舟運をおこし、甲州一円の年貢米を江戸へと廻送したが、この舟運はやがては甲(山梨県)信(長野県)駿(静岡県)を結ぶ一般商用物資の流通路として、また、身延山詣でや東海道線汽車利用の人々の足として、その隆盛をきわめていった。

ところで、富士川舟運の元河岸であった鰍沢河岸から岩淵河岸まで、川丈け18里(約72km)の舟路には、天神ヶ滝の外に、屏風岩・本釜・尼ヶ淵など、岩礁や淵によるアクバは処々にあり、その数は十とも十二ともいわれていたが、なかでもこの天神ヶ滝は、別に『天神ヶ淵』とも呼ばれて、一つは岩礁による瀬となり、一つは岩にあたって淵となり、この舟運最大の難所であった。

舟路改修と限らず、この富士川流域の人々にと

っては、定式川除け・急破川除けと、その川除け普請は歳々のことではあったが、文化13年(1816)の冬から同14年春にかけての天神ヶ滝舟路改修は、金壺千両の工事費と、鰍沢河岸・青柳河岸(現山梨県増穂町)・黒沢河岸(現鰍沢町)の三河岸および地元箱原村・羽鹿嶋村(いずれも現鰍沢町)両村の人々延べ四万人を動員しての大工事であった。この功を、「水行難場有形図絵」と題し、近くの七面堂に奉納した絵馬には、

「富士川通箱原村地先、羽鹿嶋村地内字天神ヶ滝玄石、一名ウナギヶ淵ト唱へ常ニ水青ク渦マキテ其深サヲ量リ知ルモノナシ。モシ此玄石へアヤマチテ舟ヲ乗リアツレバ、反的ニ舟ハ粉タトナリ、人舟トモニ岩洞へ吸込レ助命スルモノナシ。誠ニ物スゴキ有様也。往来ノ人ノ知ル所也。尤川通ニ於イテ第一ノ難船場ナルニヨリテ、三河岸外両村ヨリネガヒナリテ、漸ク文化十三^酉師走、

御仁恵ノ大命ヲ蒙リ、即既ニ其役ニアタレリ。仍而難船場除ノ工夫ヲ日夜朝暮ニ擬シ、与風オモヒアタリテ右場所近キ谷沢タノ大石ヲ採出ス事ヲ得タリ。扱、上手ノ川中ニアリシ妨ノ人喰石ヲ埋潰シ大石積トナシナバ、鰍淵ノ千尋ノ丈ケモ洲ニテ押シキリツラントハカリテ、師走中旬ヨリ発工セシニ、二六時中丹誠ヲ抽テ精カヲツミシニ、天幸トイフベケレ、果タシテ翌^丑二月中旬マデニ其功ナリヌ。

(中略) 人々此ホドノ

御仁恵ハ勿論、玄石難船場トイフハ已來名ノミトナリテ、往々ハ人々忘ルル事モアラメト、其名ノ碑ヲ建テ萬代ノ宝ノ銘トハナセリ。」と、讃えている。

舟底一枚地獄の沙汰の船頭たちにとり、この天神ヶ滝の改修は、天の恵みでもあったろうか。

(望月武美 鰍沢町町誌編さん室)

まりつき唄

所甲州荊沢宿よ

音に聞えし湊屋さんの

二人娘のあるその中を

今年^{とし}やよい年豊年^{とし}どしよ

身延参詣^{みえんさんぎ}えやるではないか

いうと娘は嬉^{うれ}しく思い

向う隣の仕立屋さんに

さあさ仕度^{たく}をお頼み申す

姉のしたくは木綿^{こで}の小袖

妹のしたくはちりめんづくし

帯は当世筑前博多

三重と廻して矢の字^{やの}として

足袋^{たび}は白足袋ハツ緒^{せつ}の雪駄

さあさやるからお頼み申す

それじゃ父^{とと}さんいって参ります

それじゃ母^{かか}さんいって参ります

早く帰れと二親^{ふたおや}さんが

はいといったは妹のお菊

とりのなくとき家ぶんだして

お日のさすときや鰍沢宿よ

二軒茶屋にどち^{ちよ}いと腰かけて

お舟でゆこうか陸地^{りくち}でゆこう

陸地いやいやお舟でゆこう

舟のねだんはいくらときけば

おまけ申して百二十五文

さあさゆくからお頼み申す

舟は新し船頭^{ふなづか}さんは若し

一里半ばかそろそろいって

ここはどこよと船頭^{ふなづか}さんにきけば

ここは危い天神が滝よ

止めて下さいのう船頭^{ふなづか}さん

百や二百じゃ相止められん

いうと間もなくお舟がわれて

姉は流れる妹は沈む

どうせ死ぬなら二人は共よ

南無妙法蓮華經と手を合わす

川の端へとお石塔建てて

帯をとかして塔婆とあげて

赤いカンザシ線香とあげる

石を拾ってお丸とあげて

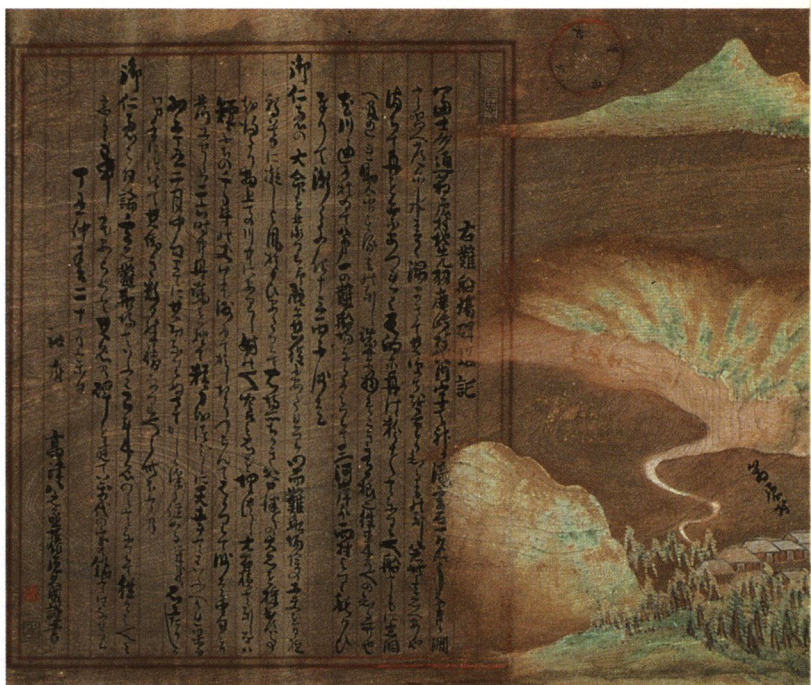
砂^じりをつかんでお米とあげる

男通らは白ぶきあげて

女通らは花ぶきあげる

ちよいと百ついてユリの数

(これで一貫貨し申した)



水行難場有形図



水行直仕形図 (鰍沢町郷土資料室蔵)

